





# 摂食嚥下支援センター開設



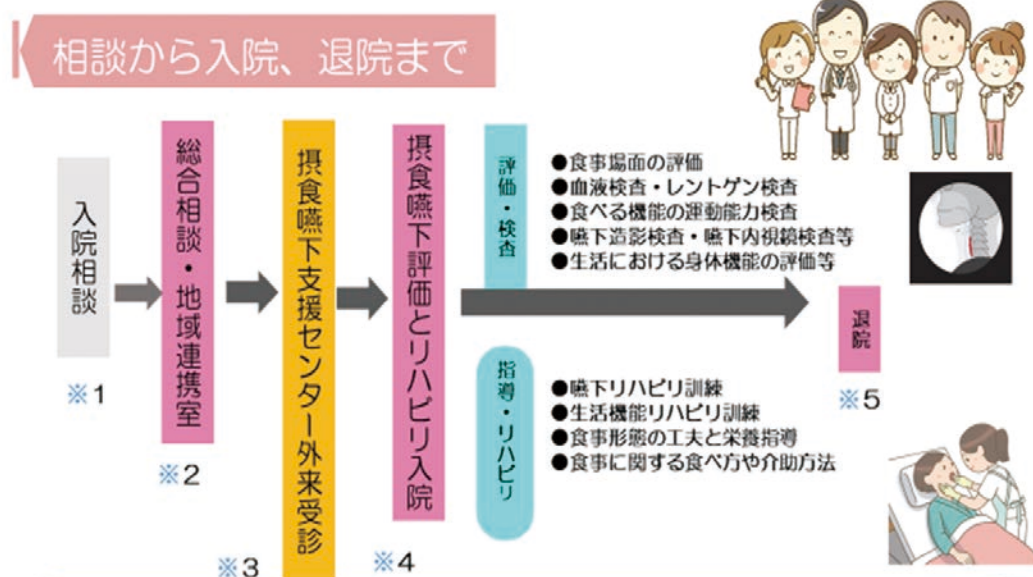
現在、西播磨・中播磨圏域においては、地域医療における回復期・生活期の摂食嚥下機能を適切に評価し、必要な訓練や指導を行い、地域に還元できるようなシステムは確立できていません。リハビリ専門病院として、当院がこれまで多職種によるチーム医療により取り組んできた、脳血管障害患者・パーキンソン病や地域高齢者の摂食嚥下障害機能向上にかかる治療実績等を生かし、摂食嚥下障害を早期に発見し、誤嚥性肺炎予防及び、オーラルフレイルなど、安全に食べるための専門的な評価・指導を目的として、2020年11月より、『**摂食嚥下支援センター**』を開設いたしました。

回復期のみならず、在宅・施設入所（生活期）における摂食嚥下障害のある患者さんの短期入院による評価と生活指導を行い、今後の栄養管理や誤嚥予防に役立てるよう支援します。

2週間程度の入院により専門的な検査（嚥下造影検査や嚥下内視鏡検査）や栄養評価と、それに基づいた嚥下リハビリテーションや姿勢の調整、食事内容、安全な食べ方のアドバイス等をリハビリチームにより行います。

かかりつけ医（歯科医）の先生から、紹介状・採血等の検査データを当院 総合相談・地域連携室へFAXで送信してください。また、退院時には、かかりつけ医宛に情報提供させていただきます。

※ご相談がある場合は、総合相談・地域連携室 初診受付担当にてお伺いいたします。



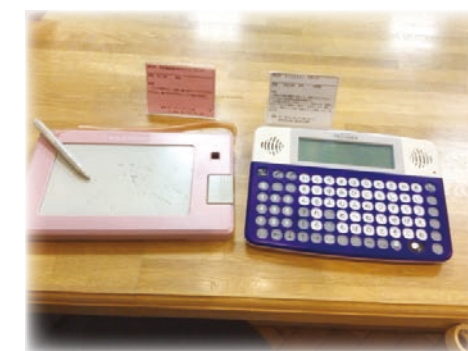
- ※1 かかりつけ医（歯科医）の紹介状・血液等の検査データを当院の総合相談・地域連携室宛にFAXしてください。
- ※2 接触・嚥下支援センター外来への受診日について当院の医事課より、かかりつけ医（歯科医）へ受診予約表をFAX致します。患者さまの病状により入院の適応がない場合には、入院リハビリをお断りする場合があります。
- ※3 **摂食嚥下専門外来は、原則第2・4金曜日（午前）に受診して頂きます。**
- ※4 摂食・嚥下リハビリ入院は、2週間程度です（入院期間には個人差があります）
- ※5 退院時には、かかりつけ医宛に情報提供させていただきます。退院後には、かかりつけ医でフォローをお願いします。

# 『コミュニケーション機器について』

研修交流センター 北川 博巳

日常生活では私たちはどのようにコミュニケーションを取っているのでしょうか？一般的にコミュニケーションと言えば、言葉や表情、身振りなどで人と人がお互いにやりとりをすることが多いと思います。また、近頃は携帯電話・スマートホンの普及で電話やメールで連絡が取りやすい環境になり、遠方の人とのコミュニケーションも取りやすくなったのではないのでしょうか。さらに、SNSで自分の思いを世界中に発信したり、インターネットを利用してオンラインのリモート・ミーティングを行ったりなど、ICTを活用して人と社会とのやりとりを可能にする広い意味でのコミュニケーションも発展しています。

コミュニケーションをとるためには、見る・聴く・話す・読む・書くなどのスキルが必要になりますが（最近では機器の操作も入るのかもしれませんが）、**これらの機能を補完する福祉用具は沢山あります。**たとえば、視覚障害の方たちには**点字、拡大読書器、音声出力商品、音声読み上げソフト**、聴覚障害の方たちには**補聴器、筆談用具、フラッシュで知らせるライト、字幕放送**などがあります。肢体不自由の方たちには**会話補助装置や意思伝達装置、それに関する多種多様なスイッチ**などが揃っています。さらに、認知症や知的・発達障害のある方たち向けの**コミュニケーション支援ボードやアラーム**などで予定を覚えてくれる道具などもあります。福祉用具展示ホール（コムプラザ）におきましても、**会話補助装置、筆談ボード、視線入力装置、コミュニケーションロボット**などいくつか機器を展示していますので、見て、触れて、試してみることができます。



コミュニケーションロボットや支援装置

さて、最近ではIoT家電やスマートスピーカーなど、福祉用具ではない一般向けで便利な機器が出てきました。特にスマートスピーカーはインターネットに接続して、家電用の専用リモコンと繋げてスマホで設定をすれば声で命令するだけで家電の設定が可能になります。しかも安価で手に入るようになりました。また、タブレットやスマホも基本設定で障害者対応があり、話しかけることで音声認識をして字幕のテキストがでるようなアプリをはじめコミュニケーションを支援してくれるアプリも多くあります。これからはこれらの活用も賢く考えてゆく時代になりそうです。